

ハイデルベルク信仰問答より

問 107 それでは、私たちは、今言われたうちのどれかで、隣人を殺さなければ、十分なのでしょうか。

答え いいえ、十分ではありません。なぜなら、神が嫉妬、憎しみおよび怒りを禁じられるときは、自分を愛するように隣人を愛し、忍耐、平和、柔和、憐れみおよび友情を示し、できる限り侮辱をおさえ、私たちの敵に善を行なうことを、私たちに求めているからであります。

[別訳]

答え いいえ。神はそこにおいて、ねたみ、憎しみ、怒りを断罪しておられるのですから、この方がわたしたちに求めておられるのは、わたしたちが自分の隣人を自分自身のように愛し、忍耐、平和、寛容、慈愛、親切を示し、その人への危害をできる限り防ぎ、わたしたちの敵に対してさえ善を行う、ということなのです。

第六戒 あなたは殺してはいけない。(出 20:13)

「殺してはいけない」という表現は消極的ですが、本問答書はこの教えの本旨である「隣人を愛せよ」という積極的な側面にまで踏み込んでいます。

「嫉妬」「憎しみ」「怒り」という三要素は、「殺人」と同じ根を持つものとして警告されています。しかし、これらはどうしても人の心に湧き上がってきってしまう感情であって、抑えがたい面を持っているでしょう。それらを無理やり押さえ込むのではなく、そのような感情を抱いてしまう存在であることを認め、根本から癒してくださる聖霊の働きに身を委ねる必要があるのです。「怒りを神に任せる」「裁きを神に委ねる」ということを、より実践的に考えてみましょう。

①嫉妬……キリスト者はあらゆる劣等感から解放され、人と自分とを比較しない本来の自分を取り戻していくことができます。自分は神様がユニークな存在としてお造りくださった傑作であることを知るとき、相対的な見方によって歪められた自己像が修正されていきます。

②憎しみ……自分に害を加えた者への怨念は簡単に心から消えるものではありませんが、その人を許すことのできない自分を認め、そのような自分を愛し受け入れてくださっている神の恵みに浴していくとき、主イエスの十字架は私たちの心の傷を癒す作用を始めます。

③怒り……人の怒りは、多くの場合心の奥底に潜む傷に反応して燃え上がります。何らかの出来事によって怒りが湧き上がるとき、まだ癒されていない自分の心の傷と向き合うチャンスが訪れていると捉えることができます。

上記の事柄は「私たちの心に生じる負の感情にどう対応するか」という、福音に生きる場所の消極面を扱っていました。ここからは積極面としての「隣人を愛する」という事柄について考えてまいりましょう。

①**隣人を自分自身のように愛し**……主イエスが言われる「隣人」とは、敵対する者であっても自分の助けを必要としているすべての人を指し、良きサマリヤ人にとってのユダヤ人、ユダヤ人にとってのサマリヤ人です。歴史的に長い争いがあったとしても、目の前で苦しんでいる人に手を差し伸べるならば、福音は過去を全く新しく造り変え始めます。

②**忍耐、平和、柔和、憐れみおよび友情を示し**……これら五つの要素に共通して含まれているのは、負の感情が渦巻く状態を正へとひっくり返す力ですが、それは人間が生来持っている力ではありません。神の愛にふれた人に与えられるダイナミックな喜びから出るものであり、神の「新しい創造」と言えます。

③**できる限り侮辱（危害）をおさえ**……「できる限り」という慎重な言い方には、パーフェクトにできなくてもよいという譲歩、そして優しさが込められています。それぞれの信仰の成長の過程において精一杯の生き方を志したいと思います。

④**敵に善を行なう**……自分に対して負の感情を抱いている相手に対し、同じ感情をもって返さず同じ土俵に乗らないというだけでなく、むしろその人が喜ぶことを行なうことで憎しみの連鎖を破壊してしまうことがキリスト者に与えられた「十字架の力」です。主イエスは十字架上で敵意を無力化し、ご自分に従う者に福音に生きる道を示してくださいました。

「殺してはならない」という教えを幅広く学んでまいりました。この旧約の教えは主イエスの十字架によって成就したのであり、主イエスこそがまことの律法解釈者、聖霊こそがその実現者なのです。